



無色の珠

硯 山 人

むかし、或る所に大層御金持ちの家がありました、廣い御庭のうちには大きな瓢箪の形をしたお池があり、又その向ふ側には美しい築山があり、お池の中には鯉や真鯉が澤山に面白そうに泳ぎまわり、築山の上には小松がいつも青々と繁つて居ります。

この家の一郎さんと云ふ男の子がありました。一人息子でありましたからお父さんやお母さんのお愛がり方はそれは、一方ではありません朝夕大勢の下女下男にかしづかれ何不自由なく暮して居りました。

何でも一郎さんのほしいと思ひまするものは皆買つて頂き、玩具の活動寫眞や飛行機やら一郎さんの玩具箱には一杯にありました。

然しそれは決して一郎さんがねだつて買つて頂いたのではありません、皆、一郎さんがおとなしいのでお父さまやお母さまやおちさんやおばさんが御褒美に買つて下さつたのです。

一郎さんは誠に性質のよい禮義正しい子でよく勉強いたしますから、學校でもいつも先生にはほめられ、又お友達からは大層敬はれて居りました、一郎さんは大層壯健な質でまだ生れてから一度も病氣と云ふ事をいたした事がありません、それは一郎さんがお父さまやお母さまのおつしやることをよく守り決して不養生をしなかつたからです。

或日の事、一郎さんは自分の勉強室で椅子にもたれて一生懸命に、其の日學校で先生から教へていたゞいたところを復習して居りました、すると足元で小聲で誰かゞ。

『一郎さん。』

と呼ぶ聲がきこへます。フト足元を見ますと、小さな眞白い髻の生へたおちいさんが立つて居りました、そこで一郎さんは、大層びつくり致しまして、

『オヤ、あなたはいつ僕の部屋にきたのですか、何か僕に御用ですか』
とたづねました、おちいさんはニコくと笑ひながら、

『そうです、あなたはよく御勉強なさりますし、またよくお父さまやお母さまの、おいっつけを御守りになりますから、今日はあなたのまだ見たことも聞いた事もない様な、美しい立派なものを差上げませうと存じて参りました。』

と答へました、それをきゝまして一郎さんは

『それは、おちいさん、一體何ですか。』

と熱心にたづねますと、

『それですか、それは美しくい無色の小さい珠です、之はまだあなたが御存

知らない寶物であります。』

そこで、一郎さんは急にその立派な、色のない珠と云ふのが見たくまりましたので、

『おちいさん、一體その無色の珠と云ふのは、何處にあるのですか。』
ときゝますと、おちいさんは、

『その珠は、何處にでもあるのです、けれども容易に手にははいりません、
そしてあまり御金持ちの家にはありません、此の珠からは金でも銀でも、
形のありますものは勿論名譽でも富貴でも、皆振り出すことが出来ます。』
と申しました、之をきつて一郎さんは、

『それはなんと珍らしい珠なのでせう、僕は今迄なんでも自分の思ふ事や、
自分の願ふ事はかない、自分程幸福な者はないと思ふて居りましたのに、
世の中にはまだそう云ふ、立派な珠をもつてゐる人もあるのですか。』

『そうです、そして此の珠から振り出した、名譽や富貴でなければ少しもね

「うちがありません。』

そこで、一郎さんはおちいさんに、どうかその無色の珠のある所へ連れて行って下さいませと切にたのみますと、おちいさんは、ニコ／＼しながら、

『それはおやすい御用です、然しその代り無色の珠を採りにゆく途中はどんな事がありましたも、あなたは「ハイ」より他の言葉を云ふてはなりません、もし一言でも他の言葉を云へば、もうその無色の珠はともあなたの手にははいりません。』

と申しました、一郎さんは、きつと「ハイ」より他の言葉を云いませんと堅く約束いたしましたので、おちいさんはそれでは珠をとりにはゆかうと一所に出掛けました。

此のおちいさんは、小さいくせに大變に足が早いのです、一郎さんは始終驅足をしなければ、なかく追付けません。

ドン／＼と行きまする中、大層急な坂に參りました、すると坂の途中

で、一人の小僧さんが大きな荷車をひき上げやうとして困つて居ります。之を見ますると、おちいさんは一郎さんに向ひ、

『あなたはあの車の後押をして、坂の上まで押上げて、おやりなさい。』

と申しました、一郎さんは、先刻の約束通りたゞ。「ハイ」

と返事を致しましたきりで、早速その荷車の後押をしました、ところが此の荷車の重い事、それはく一通りではありません、エンヤラクくいつてやうくのこと、坂の上まで押し上げました。

ヤレ草臥れたと思ふ間もなく、おちいさんはもうドンく先にあるいて行きます、一生懸命で追附きますと、

『一郎さん、むかうで、女の人が水を汲みこんでゐますから行つて手傳つて

おやりなさい。』

と申しました、一郎さんは又約束通りたゞ。「ハイ」

と答へて。すぐその女の側にゆき釣瓶で水を汲みこまんと致しました、ところ

が、此の釣瓶の重い事、それはく一通りではありません、瓶に一抔にする迄に、一郎さんは自分の腕が折れはしまいかと思ふ程でありました、やがてまた五六丁も参りますと、おちいさんは。

『一郎さん、むかうに鍛冶屋が見えます、鐵は熱い中にきたへねばなりません、早くいつて手傳つてゐらつしやい。』

と申しました、そこで一郎さんはまた「ハイ」

と答へたきりで鍛冶屋の店にはいつてゆきました、さて槌をふり上げて、トンカチくとやりはじめましたが、又この槌の重い事、それはく一通りではありません、けれども一郎さんは少しも不平らしい様子もなく、流るゝ汗をふきふき、手傳つて居りました、又おちいさんと鍛冶屋を出てからドンく一所に行きますが一向無色の珠らしいものはありません、けれどもはじめの約束もありますので「ハイ」より他一言も云ふ事が出来ず、黙つてついてゆきますると、やがておちいさんは一郎さんの方を、クルリとむきまして、一郎さんの額から

流るゝ汗を見ながら。

『一郎さん、世の中に此の上とない貴い珠は、いまあなたの額の上を流れて
ある汗の珠です』

と云ひますかと思へば、忽然として小さな白髯のおぢいさんの影はきえてなくなりました。

(終り)

